

申請者	学科名	看護学科	職名	助教	氏名	網野 裕子
調査研究課題	乳幼児の短期入院に付添う母親の疲労に関する研究					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	網野 裕子	保健福祉学部看護学科 ・助教	小児看護学	代表者・連絡責任者・研究の実施・会計責任者	
	分担者	沖本 克子	保健福祉学部看護学科 ・教授	小児看護学	研究の実施	
調査研究実績の概要	<p>小児看護学領域では、家族を子どもの重要な存在として位置づけ、子どもと家族を中心とした看護のアプローチが有効であると考えられている。中でも母親は、子どもと特に密接な関係をもっており、子どもの入院に付添う母親への看護アプローチは重要である。子どもの長期入院では、長期間の入院という面から母親の抱える問題が表面化しやすい。一方、短期入院では退院が早いため、母親の問題にまで看護師の目が行き届きにくいのが現状である。</p> <p>近年、短期入院の子どもに付き添う母親の心理的状況を明らかにした研究が散見され始めた。筆者らは、母親の心理的状況だけでなく身体的状況や社会的状況も含め、トータルで母親の体験を明らかにする必要があると考え、先行研究を行った。その中で、特に乳幼児期の子どもに付き添う母親に着目した。乳幼児期は母親との分離不安が強い時期であり、子どもの精神的安寧のため、家族に付き添いを求められることが多い。そして、付き添いの大多数が母親というのが現状である。この先行研究では、母親は「ひとりでがんばっている」ことが明らかになった。そこで今回の研究では母親の疲労度を測定するとともに、属性と疲労度との関係を明らかにすることを目的とした。本研究により、疲労度の可視化を図ること及び属性等との関係を明らかにすることにより、疲労度が高くなるリスクのある母親を見つけ、看護師の注意を喚起するきっかけになる、また母親への看護アプローチを検討していくための基礎的データとなると考えた。</p> <p>調査の対象者は、急性疾患（気管支炎・肺炎・胃腸炎などの感染症）で短期入院した子どもの母親200名とし、データ収集方法は、1）ランダムに選出した全国の300床以上の小児科がある病院へ研究を依頼する、2）研究協力の承諾が得られた病院へ質問紙を配布し、対象者へ渡してもらい、3）無記名で記入後、郵送してもらい、とした。また、調査内容としては、1）属性：対象者の年齢、子どもの年齢、家族構成等、2）子どもの入院に関する事：入院した子どもの年齢と疾患名、入院してから期間、入院中の付き添い交替の有無、付き添い交替時の過ごし方等、サポート、3）自覚疲労調査：産業疲労研究会の作成した「自覚症しらべ」を使用し、午前・午後の2回、自覚疲労度について調査する、とした。</p> <p>急性疾患（気管支炎・肺炎・胃腸炎などの感染症）で入院した子どもの母親200名を対象とする予定で、ランダムに選出した全国の300床以上の小児科がある病院へ研究を依頼したが、施設内の倫理審査委員会等の関係で協力が得られる施設が非常に少なかった。そのため、追加で対象施設を増やし、研究依頼を行った。</p> <p>現在、アンケートを配布・回収しているところであるが、今後さらに依頼対象施設を増やす予定である。</p>					
成果資料目録	なし					